

結び

第 I 部 中央アジアにおける仏教図像と經典

第 1 章 『法華經』より見た神変像

ここでは、アフガニスタンのカピシ地方より発見された仏像のうち、神変像とよばれる一群の同一様式に対して『法華經』の品々との対応関係を明らかにして、その制作年代を推定した。研究の発端は、これまで当該研究において大乘仏教からの考察があまりなされていないことに疑問を持ったことである。

はじめに双神変の示される『法華經』妙莊嚴王本事品第 27 の記載と、パイターヴァ出土の焰肩仏坐像を解明の手がかりとし、またザベルセラージュ出土の双神変像浮彫では、向かって左側の 4 段に分かれるレリーフの描写と『法華經』提婆達多品第 12 に説く龍女の男子に変成して成仏する物語が対応すること、そしてまた下部に 6 体の同品に説く蓮華化生に見えることがその決め手となっている。

パイターヴァ出土の焰肩仏立像浮彫では、仏陀左右の龕に坐す、向かって右側の仏陀の痩せ細った身体の特徴が『法華經』見宝塔品第 11 に説く多宝仏の禪定の姿、すなわちサンスクリット文で「四肢が痩せ身体衰えた姿」と述べていることに一致する点を裏付けとしている。他の『法華經』序品第 1、『法華經』化城喻品第 7 の作例の場合は、造像の同一様式からの推定である。年代は発掘報告による伴出したヴァースデーヴァ王コイン（3 世紀初頭）を根拠としている。

第 2 章 『觀無量壽經』による大神変図

パキスタンのラホール博物館所蔵のガンダーラ・モハマッドナリー出土の仏説法図は、通説の舎衛城大神変図ではなく、『觀無量壽經』による一変相図であることを明らかにした。

1909 年、A. フーシェによる釈尊の舎衛城における大神変図として説いた一説が、数多くの反論を受けてもなお存在する理由は、何より仏教が釈尊一人により説かれたという一点に回帰するところにある。研究史を通して明らかになったことは、問題のフーシェ説に向けて放たれた矢は多かったにもかかわらず、我が国でそれらの紹介が不足していたことである。またガンダーラにおける大乘仏教の図像の存在がなかなか明らかにならないこと等であった。

ここでは大乘仏教の思想的特色を通して図像との関係を探り、『觀無量壽經』による觀想の第 6 觀から第 10 觀の記述がこれに対応すること。そしてその後の第 11 觀から第 16 觀までの記述も当てはまることを明らかにした。とりわけこの經典中の「修多羅（經典）と像想を結びつけよ」とある記述が決め手となっている。

今後に残された課題は、まだ出土していないこの經典のサンスクリット本が見出されるか否かである。年代は頭冠の大きな花飾りの頻出するクシャノササーン（3 世紀後半）から、キダーラクシャーン（4-5 世紀）の時期に位置づけられる。

また、ガンダーラ・サフリバロール出土の三尊像が、上節の考察から導き出された大乘仏教と関わるか否かについて検討した。すなわち、これまで仏陀と弥勒と観音とした当三尊像は、阿弥陀と観音と勢至のいわゆる大乘經典の『観無量寿經』から理解される阿弥陀三尊像であること。そして当台座浮彫は、左右にアパララ龍王とアングリマーラの帰仏説話が示されるとする従来の捉え方ではなく、『観無量寿經』の序説にいう韋提希夫人とその子阿闍世王の聞法譚として理解できることを明らかにした。

また、三尊形式が浄土經典では成立当初に遡ると指摘されていることも考慮すべきであり、菩薩像の多くが弥勒像と同形であることも『観仏三昧海經』で述べている。そして観音と勢至の像は、頭冠装飾の違い以外、見分けがつかないと『観無量寿經』で述べていることも参考になる。したがって、いずれも上記同様「修多羅（經典）と像想を結びつけよ」とある『観無量寿經』の記述が決め手となっている。

第3章 四天王の奉鉢と弥勒

ガンダーラで見出される仏鉢図は『太子瑞応本起經』に記す四天王の奉鉢記事と相応して、その後変遷をたどっていく。

チャンディガル博物館所蔵の「弥勒菩薩・大神変図・仏鉢供養を表すガンダーラ浮彫」については、すでに『般舟三昧經』で説く、兜率天上の弥勒（上段）と阿弥陀仏浄土（中段）の組み合わせとする指摘があり、未来仏（弥勒）と現在仏（阿弥陀）という組み合わせとして理解することで納得がいく。すなわちここで釈迦仏を中心にしないという視点を提起するという点である。このガンダーラ特有の仏鉢を付すレリーフは『太子瑞応本起經』以降、説話として途切れなく仏典に記載され、かつ増幅されていることが理解される。したがって、これを裏づけとして、仏鉢とともに造像される仏陀が、釈迦の遺法を受け継ぐ弥勒仏としての可能性を示していることを明らかにした。

第4章 『華嚴經』ヴァイローチャナ仏の関わり

バーミヤーンの二大石仏について、バーミヤーン石窟全体が従来における通説の4-5世紀ではなく6-8世紀に絞られたとする研究結果を基に、各説の検討を行ないその当否を明らかにした。その後、イスラム原理主義のタリバーンによる二大仏爆破（2001年3月）後、ドイツ隊による炭素年代の測定により6世紀代とする結果が出されて、この年代をさらに支持することとなった。

筆者の指摘は、6世紀に当地を支配する初期突厥（チュルク）の関わりについてであり、これを漢文文献や、碑文、東ローマの史料等で検討した。その結果、6世紀後半の突厥ディザブロス（室点密）の関わりがクローズアップされ、突厥の受容した当時の仏教は、主に華嚴教で、主尊がヴァイローチャナ（毘盧遮那）仏であること、壁画に辮髪姿の仏菩薩が描かれていること、またチュニクの供養者やリュトン等が、突厥の塞外民族としての関わりを明らかにしていること等を裏付けとして論述した。

また、バーミヤーンとキジル石窟で、ともに辮髪(べんぱつ)の仏菩薩(ぶつぼさつ)が見出されることから、両者の関係性を明らかにした。すなわち、バーミヤーンで指摘した突厥(チュルク)の関わりが、そのままキジルにおいても考えられること。それはまず突厥の治所がキジル石窟に近く、また一般に小乗の仏教王国として知られるキジル石窟でも、この時期に大乘仏教を好む王がいたこと、そしてキジル石窟の壁画年代が炭素年代による測定で、6-7世紀を示す結果が出されたこと等を裏付けとしている。

以上、第I部中央アジアにおける経典と図像の関係では、第1-3章でガンダーラとその周辺における大乘仏教の関係について考察した。その結果、第1章でアフガニスタンにおけるカピシ様式が『法華経』の各品に対応することを明らかにし、第2章で、これまで舎衛城の大神変図として特定されていた図像が、釈尊の小乗教上における仏伝中の物語としての解釈よりも、むしろ大乘仏教として発達を始めた阿弥陀仏の世界を観想する『観無量寿経』による図像として解釈されることを明らかにした。またサフリバロール出土の三尊像でも、同様に阿弥陀三尊像として理解できることを指摘した。その結果、ガンダーラ地方では大乘仏教がほとんど発達しなかったとする従来の一般的考え方に対して、これを乗り越える新たな視点を提出する形となった。

第3章では、『太子瑞応本起経』に記す四天王の奉鉢記事とガンダーラの浮彫レリーフが相応し、このガンダーラ特有の仏鉢を付すレリーフが『太子瑞応本起経』以降、説話として途切れなく仏典に記載されかつ増幅されていること。そして、チャンディガル博物館所蔵の「弥勒菩薩・大神変図・仏鉢供養を表すガンダーラ浮彫」が『般舟三昧経』で説く、兜率天上の弥勒(上段)と阿弥陀仏浄土(中段)の組み合わせとする指摘を裏付けとして、仏鉢とともに造像される仏陀が、釈迦の遺法を受け継ぐ弥勒としての可能性の高い、大乘仏教の一展開としての図像であることを明らかにした。

第4章では、アフガニスタンのバーミヤーン石窟と中国西域のキジル石窟の、双方に類似して見られる尊像の辮髪表現に着目して、辮髪を風俗とする中国の塞外民族が双方を支配したと考え、その主体が突厥(チュルク)によるという可能性を引き出している。その結果、突厥が中国北朝斉国と交流し、華嚴経典を学んでいることを根拠として『華嚴経』の教主毘盧遮那(ヴァイローチャナ)仏の尊像において、バーミヤーン二大仏と斉国の仏像との類似性を明らかにした。その後、二大仏爆破後の炭素年代の測定結果により、二大仏の制作年代が共に6世紀と検証されたことで、筆者の年代比定が裏付けられることとなり、これにより、これまで西暦4世紀説が主流であった当該石窟は、およそ200年下る西暦6世紀を中心とすることが明らかとなり、仏教の東漸史において、東から西へのいわば逆流現象が見られることを示して、これまでの考え方に注意を促す形となった。

また、造像と史料の関係では、筆者が直接発掘に携わったウズベキスタンにおけるダルヴェルジン・テパの仏教遺跡において、当遺跡がこれまで西暦1-3世紀を中心としたとする見解に対して、出土コインの多寡や土器の分類、そして仏像の形式や、仏像にみえる螺髪(らうぱつ)の存

在等を検討し、西暦 3-5 世紀の可能性の高いことを明らかにした¹。2006 年に筆者の行った発掘調査において収集した遺品の炭素年代の分析結果で 3-4 世紀の可能性が示されたことで²、これまでの筆者の考察を大枠で裏付ける形となり、自信に繋がったことを付言したい。

¹ 『ダルヴェルジンテパ DT25, 1989-1993 発掘報告』創価大学 1996,p.41-55。

² 2006.11.16 株式会社パレオラボによる報告。